

## 他人の子供

岡本千春

「三十させ頃四十し盛りよ」  
さんじゅう じじゅう

受話器の向こうから洋子の元気な声が聞こえてくる。

英子一人の静かな午後。

外に出るのも億劫だし、まぶしい日差しはシミの元だから。こんな昼どきは家に居てクーラーでもかけて、となると無性に誰かとおしゃべりしたくなる。二階に続く階段の中ほどに腰を下ろして小股開きになると受話器を持ったまま膝に肘を付きいつもの体勢を取る。

長電話をするときには決まっただ。

「江角マキコだって四十過ぎて生んだんだもの。まだまだこれからじゃない」

「そうね……でもこればかりはねえ……」

「愛され方が足りないんじゃないの」

「愛されるも愛すくりーむも三十七のオバンと四十二のオジンじゃあそろそろ資源の方も残り少なくなってきたみたいでね」

「何言ってるのよ。女は三十五からよ！ で男は四十から。晴彦さんにもうひと踏ん張り、たっぷり花芯に差し水してもらいなさいよ」

「たっぷりねえ……」

「こちとらその方面にはとんとご無沙汰。朝顔の露ほどもないんだから」

「あれから新しい住人いないの？」

「借り手なし。ずーとガラガラの空・き・家」

「学生時代あれだけ満員札止めだったくせに」

「今思えば一番熟れ頃の店子がいっぱい居たのに、ちよっと軒下に雨宿りしたケチな男にひっかかっちゃったもんだわよ」

結婚して十年の英子。

離婚して十年の洋子。

二十年來の友に、自然と口元は軽くなる。まるで結婚まもないカップルがテレビに登場するや夜の生活までもをあげすけにしゃべる、そんな視聴者参加の番組のように。

「でもいまどきはバツイチなんて一回駐禁するようなもんでさあ、たいした違反のうちにも入らないんだから、洋子こそ、もうひと花咲かせなさいよ」

「いい花咲かすにゃいい種がないとね」

「いい種蒔いても畑がよくないとね」

「ずいぶんと言ってくれるじゃないの」

「いやとにかく使うもんは使わないとねっ。頭だつてボケてくるって言うから、あんまり借家人不在が続くとそれこそ蜘蛛の巣が張るわよ」

「女も蜘蛛の巣張らしてるようじゃ、男どころか蠅の子一匹寄つて来やしないわ。早いとこ手頃な箒一本見つけて大掃除しなくちゃね」

「隅々まで煤払いできる？」

「そう握りやすくして節くれだたない奴をね」

洋子とは際どい話だろうと軽いノリで話せる。何よりこつちが手にしたボールで軽くサーブを打つと、打ったとき以上に弾んで返ってくる。それをバン！と軽くラケットで受け止め、また笑いながら返す。そのラリーの応酬がたまらなく刺激的で、ついつい長々と話し込んでしまうのだった。

英子自身、三十間近での結婚だっただけにでも子供をと願ったが、思うほど簡単にできないのが子供のようだ。

まだかまだかを連発していた英子の母も最近では子供のことにはあえて触れないでいる。

多分にプレッシャーを与えてもという我が娘への母なりの心遣いだとは思うけど。こうしてまったく言われなくなってしまうと妙なさびしさを感じるものだ。あきらめたわけでもないのだろうか。

以前は週に何度か出かける大型ショッピングセンターですれ違う妊婦に軽い嫉妬と羨望のまなざしを送ったこともあるが、今はちゃんこ当番の相撲取りだと思い、やり過ぎしている。授かりものというように、こればかりは焦って見たところどころでどうにかなるわけのものでもないのだから。わかっていることではあるけれど、心の内で様々な思い

が渦巻いている。それだけにときおり掛ける洋子への電話でとりとめのないことをしゃべりあうひとときは思い悩むすべてのことを忘れさせてくれる。

気がつけばいつも軽く小一時間は受話器を握っているのだった。

月に一度の産婦人科通いもそろそろ一年になる。

カーテンで仕切られた診察台。毎度魚のはらわたをえぐり取るようにして深く挿入されてくる医師のひと指し指。その度に二枚におろされているような気がする。

繰り返し打ったホルモン注射。

何度も飲んだ排卵誘発剤。

胃カメラを子宮から入れられているような検査もした。

下半身むき出しのしどけない姿を何度医師や看護婦にさらけ出したことだろう。

「奥様の検査の方はこれですべて終わりましたので。後はご主人の方を調べてみませんと」

「主人を、ですか」

「ええ四、五日禁欲したのちにだいたいこの三分の一程度の量で結構ですので」

と手渡された試験管。

これを片手にあらゆる妄想のち果てる夫晴彦の顔を思い浮かべるとそれだけで少しのおぞましさを感じた。

もしこれで晴彦の方に原因があるとわかったら……。

検査を受けて欲しいような欲しくないような、複雑な思いが交錯する。

いつもより重く感じるドアを押し病院を後にした。

産婦人科を受診した後は毎回胸に一つ重りをつけられたような気分になる。仕方ないことではあるけれど。それもあって病院帰りは毎度近くの商店街へと足を運ぶ。すれ違うにも肩を寄せあって歩くような商店街で威勢よく客を呼び込む声のする喧騒の中に身を置くと、ふっと胸に乗った重しを取り除かれるような気がするからだ。

とりあえず夕食の食材でも買おうかと思いつながらぶらぶらあてもなく歩いていると、

「奥さん、これ安くしとくよ」

一際威勢のいい声が英子を呼び止めた。思わず目をやると、

レバ刺し一本百二十円、もつ一本百二十円。

焼き鳥屋の店先でマジックで手書きしたダンボールの値札を前に赤ら顔のねじり鉢巻

きが声を掛けてきた。

「これ十本なら千円にしとくけど買うて行かんね」

十本ものレバーは…と思いついて迷っている英子の視線の側を掠めるようにして千円札が通り過ぎて行った。

「十本下さい」

差し出された千円札の先に肉付きのいい腕が続いていた。その白い腕から先に目を落とすと低い靴にショートカット姿の女がいた。二十代とおぼしき女はまるでスイカを一つ丸呑みしたような腹を妊婦服に包むと、左手は大事そうに下腹に添えた格好で立っていた。

「鉄分満点。丈夫な子ができるよ」

焼き鳥屋の親父もどこかうれしそうな顔をしながら慣れた手つきで十本ほどの串を一気に持ち上げると豪快にたれにつけこみ、袋に詰めた。

その親父の節くれだった指先を見ていると急に妙なライバル心が湧いてきた。

「私も十本いただくわ」

負けずに声を張り上げる英子だった。

居並ぶ社員達の間を通り抜け、課長の前へと進み出る大貫に社員からはおめでどうの声と拍手が送られていた。

同じように拍手を送りながらも晴彦の心のうちには少しの嫉妬心があった。

わが身の幸福は鐘や太鼓でふれ回りたいほどにうれいものではあるけれど他人の幸せはハンマーでたたきのめしたいほど妬ましいものだ。

「マジで？」

二本、と指を立てると隣に座る大貫の顔を覗き込んだ。大貫は「出産祝い」と書かれた熨斗袋を大事そうに机の引き出しにしまいこみながら、

「いきなり双子は正直ケツの穴がビビッたよ」

とどこかうれしそうな顔をして言った。

「十一月に結婚して七月にはもう二人の子持ちかあ……まったく俺の上手に行く、ひと種で二度美味しいじゃないか」

くわえ煙草の三橋が吐き出した煙を首に巻きつけるようにして言った。

三橋に大貫にそして晴彦は同期入社の上三銃士だ。お互い切磋琢磨しながらいつも先を

争っていた。抜きつぬかれつの営業成績もどこかどんぐりの背比べ的で大差のない中で三人三つ巴で争っていたのだが。こと家作り子作りに関してはどんぐりの背比べとはいかなかったようだ。

「結婚が一番早かった三橋。」

「一番遅かった大貫。」

三橋は結婚するや否や一年を置かずして年子で同学年という子作りをした。自身でも自称早乗りの三橋と自負している。

大貫は四十の声を聞いてもまだ身を固めるふうもなく、会社うちでは変な性癖でもあるんじゃないかと噂の立ち始めた頃、一回りも年下の保母と結婚するや新婚の名も取れぬうちにすぐに双子の子持ちとなっていた。

そんな三人の中で晴彦だけが結婚も子供もトップにもなれず、さりとてどんべにもなれずに常に二番手だった。それは結婚だけでなく仕事も同様で、どちらも頭一つ抜け出せないままにとうとうダークホースの大貫に子作りまでも追い抜かされてしまったというわけだ。

「えーのう若いカアチャンもらうと」

「いつもつんのめるようにして走って帰るもんなあ」

「これが最終列車やからなあ。ようやくと飛び乗って嫁さんに来てもらたんやけその分、早帰ってサービスせんと。これに逃げられたらもう永久にお次の電車は来んけな」

「新型車両がフカフカのシート倒して待ってくれとるならそら誰だって早帰って飛び乗りたいよなあ」

男達の世間話にも多分に嫉妬の入ったやっかみ半分なのは仕方のないことだけれど。

世に住まうオスという部類に入るすべての男達にとって畳と女房は新しい方がいい、はつくづく実感のようだ。

つんと上を向いた乳房。ピンク色に染まった乳首、指が吸い込まれるような肌、そして海の底深く硬く口を閉ざした真珠貝。そのどれ一つをとっても男達には羨望のまなざしを与えるものだ。

「じゃあ毎晩ひかりか？」

「いやあ朝からのぞみよ」

「朝からかあ……ってことは早朝からやけに走りまくってるじゃないか」

「四十まで我慢してたツゲが一気に回ってきたみたいだな」

「俺、自分でもこんなに好きだとは思わなかったよ」

「つてことは始発ののぞみでの中か？」

「いや俺酔っぱらって帰ってやったときの日本海のひとしずくだと思っよ」

「こだまに生きたのがまだ残ってたのか？」

「最後に一匹だけ底の方に潜んでた奴がどうにかたどりついたみたいだなあ」

「その一匹で二発的中かあ？ どうすりゃ一遍に二つも子作りができるのか仕込み方教えて欲しいよ」

「まあこんなサプライズもたまにはな……：：：：そういやあ中島のとこはまだなのか？」

まだという言葉は晴彦だけでなく英子にとっても散々と言われ続けた言葉である。こ  
う聞かれるたびにずっと笑ってごまかしてはきたけれど、この頃では周囲も気を遣って  
か言わなくなってきた。それだけに久しぶりで聞かれるとひどく重く響く。

「ああ俺ん家は車庫入りが続いているみたいでさ」

「超特急で頑張らんと、そのうち蔵出ししたときや発射せず、カラ打ちで終わるぞ」

「もついやあねえ、朝っぱらから。ここに一人嫁入り前の娘がいるのをお忘れなく」

晴彦の向かいに座る京子は男所帯の営業課の紅一点として事務をとりしきっている。  
殿方ご用達の際どい話も毎度のこととは言え、笑うに笑えず困った顔で三人を睨んだ。

「そりゃそりゃ♪〜いい日旅立ち〜京子列車は中々に出発進行しまへんなあ」

おどけて京子を茶化す三橋に、

「そんなお召し列車はいとゆるやかに車輪を回すのよ」

京子も負けじと返す。

「でもあんまり長いことホームに止まってるでとレール錆び付いちゃうよ。どれどれ僕が  
純正油一滴さしてあげようか」

豊満な京子の胸を軽く触ろうとする三橋にいつものことなので京子の防御は素早く、  
三橋の手が胸に達する前にその手を振り払う。その手が何度となく空を切る間、お互い  
じゃれあうようにして遊んでいる。そのじゃれあう二人の姿が昔の英子と晴彦にだぶる。  
意識し始めたのはどちらが先だったのだろうか？

晴彦の記憶では社内旅行で隣に座り合わせ、余興のゲームで手を握りあったのが親し  
く話すきつかけだったような気がする。それがいつしか毎晩電話をかけあう仲になっ  
ていた。

入社五年目の英子にとってはそろそろ居心地も悪くなりかけていた頃だったろう。

取り囲む女達は寿退社という女の花道をたどり次々と辞めていった。結婚しても仕事を続けるのがあたりまえの昨今でも、この会社に限ってはサービスマン残業のあまりの多さに入っては辞めていくのは常で、社員の出入りは男女限らず激しい。そんな中で会社からいいように使われている英子にとって仕事に空しさを感じ始めていた頃だっただけに晴彦は「渡りに船」だったのかもしれない。

それからの英子は社内でも臆することなく親しみをこめたしぐさを取った。まるであえて周囲に二人の仲を知らしめるかのように。

晴彦にとって恋愛に続く結婚は慎重を極めるもので、それは何より一度の婚約破棄にこりていたからだ。あの煩雑さを思うともう二度と同じ轍を踏むまいと心に誓い、機が熟すまでは隠しておきたい箍だったのだが。

あまりにあけすけな英子の態度に周りの目も変わり、晴彦の薬指は徐々に鎖に繋がれて行った。

晴彦自身、英子との結婚生活はそれなりに満足はしている。

目鼻立ちのくつきりした英子はどこか水商売風なケバを感じさせる女だが、見かけの印象とは違ってさほどの派手さはなく家事もそつなくこなしていた。ただ料理に関してはまだ少し腕をあげてくれればと思うのだが。まだ晴彦の舌を満足させるまでには達していない。

料理に満足できない分、夜の生活がその分を補ってくれればいいのだが、そっちの方向は見かけの派手さに比べてもさほどの食欲さはなく、どちらかというと淡泊な方で、男としてはいささか不満気味ではあった。

それもあってなのか晴彦の付き合いと称してのキャパクラ通いも暗黙のうちに了解してくれているようで、そういう寛容さには少なからず感謝している。その辺を加味しても晴彦にとって英子との生活はそこそこ満足のいくものではあるが。ただたまたま電話をかけてきてはあれやこれやと愚痴る母の里子にだけは辟易としていた。

「三年にして子なきは去ると言うたもんよ」

「何だよいきなり」

「昔だったら三行り半を突きつけられて里へ返されたって文句一つ言えないのよ」

「そんなこと言ったって、あいつだってそれなりに」

「英子さん、ちゃんと病院には行ってるの？」

「ああ毎月行ってるようだけど」

「子供作ることよりあの人、スタイルばっかり気にしてダイエットでもしてるんじゃないの！」

神代の昔から嫁姑は永遠の仇同士。お互いの、お互いに対する不満は途切れることなく続くのだ。まるで切っても切れないトカゲの尻尾のように。おかげで二人の間に立つ晴彦はいつもやじろべえ。どちらに傾くこともできずにただ黙って右に左にと揺れるだけだった。

「えっ俺も検査するのか？」

広げた新聞で上半身をすっぽりと覆い被すようにして朝刊を読んでいた晴彦は思わず活字から目を離した。新聞から顔半分ほど覗かせるとその額の下の細かい目は幾分大きく見開いていた。

「私のほうは一年通って一通りの検査は終わったの。だから……」

無排卵だった生理もホルモン注射と薬で排卵のある正常な月経に戻った。卵管も正常で、毎月付け続けた基礎体温表も高温期低温期の曲線ラインをきれいに描くようになり、どこにも異常は認められなかった。

「いつ妊娠してもおかしくないですね」

の医者言葉が金科玉条のように聞こえた。ここまでくると後考えられるのは男性不妊だけだと。

おずおずと差し出した試験管に晴彦は露骨に不快の表情を示した。

「これに…そんなにいっぱいなくていいから」

「うむ……」

「やっぱり二人共が子供を持てる正常な体じゃなきゃ、私一人がいくら頑張ってみたって」

「わかったよ」

「あまり急がないから。暇なときでいいから」

黙って頷くと晴彦はまた新聞に目を落とした。黙々と箸を動かすだけで何の感想もない。

美味しいかまずいかだけでも言ってくれば少しは料理に励む気にもなるのだが。何言うでもない晴彦なので英子にすれば作る張りがなく、料理の腕も上達しない。ただ出されたものは全部きれいに食べてくれるから、まあそれだけでも良しとしているけれど。



やはり二人っきりの食卓には少しの物足りなさを感じてはいる。

思えば独身時代、三十目前に控えたとき、妙な焦りを覚えた。さほど晴彦に熱い情熱があつたわけでもないのに焦る気持ちがあつた。英子をせつつかせ晴彦との結婚にしがみついたのだ。夢描く結婚が現実のものとなつたときこんなにも無残に崩れ落ちるガラスの城だとは思わなかつた。

結婚後三年を過ぎた辺りから晴彦の口数は段々と少なくなつていき、お茶を飲んで「あゝ」湯船に漬かつては「あゝ」とため息をつく回数だけが増えていった。

夜にしてもベット派の英子とふとん派の晴彦。どちらも譲ることができないままに六畳の部屋にベットと布団の両方を敷く妙な寝室になつてしまつた。

最初のうちこそ晴彦の滝のぼりが数多くみられたものの最近では布団に入るともう高軒、英子が川下りをしようにも死んだように眠りこんでいる晴彦の寝顔を見ると無理な要求もできずにいた。ただ黙つてときおり寝返りをうつ晴彦の大きな背中を見るだけだつた。

「そんな段違い平行棒じゃだめだつて」

スーパ―の中にある軽食コーナーに腰を下ろすと買い物帰り、偶然に出会つたチューミーと話し込む。独身の頃ならちよつと気の利いた喫茶店にでも入るところだが、両手をスーパ―のビニール袋に塞がれた主婦にとつて気取つて飲むコーヒーは高すぎるのだ。自販機の紙コップを片手で語らうひとときは女にとって何よりのストレス解消になる。

「だけど布団だと私、背中が痛くなるのよ」

両肩を上げ下げしてみせる。

「またそんなこと言つて。やっぱさ、肌と肌とが触れ合うからこそ亭主だつてその気になつてムラムラつとくるのよ」

「ムラムラつとねえ」

チューミーの話す擬音語がこのときだけやけに胸にぐつと迫つて聞こえた。

「だつてさあすぐに手を伸ばした位置に小高い丘やらそこから続く窪地が悩ましげに鎮座ましましてるわけだから、となりや男はやっぱさ」

ボックスシートの中でチューミーは体を半身にすると英子の鼻先近くにまで身を乗り出すや、ちよつと意味ありげな視線を送つてきていた。

十年來の親友であるチューミーと英子に洋子。

大学時代よく三人つるんでは授業をさぼりコンパやダンパなどのにぎやかな集まりにも足しげく参加をしていったものだ。

卒業後は三人三様の人生を歩いている。

「私なんてさあまったくノーマークの日に一回こっきりお手合わせしたのが見事一発ホームラン、で出来ちゃって」

チューミーは軽く下腹を叩くと、

「もう新婚旅行なんて最悪よ」

「だけど確かハワイだったでしょう」

英子の言葉にチューミーは紙コップにさしたストローに唇を付けると一旦水分補給でも言った様子で勢いよくコーラを一口飲んだ後、すぐさまストローから唇を離すとまた勢いこんで話し始めた。

「それがよ。旅行中もつわりでゲーゲーの連続で、気分は悪いは外に出るのも暑いし、人ごみの中、ショッピングセンターに出るのも大儀で。もうずっとホテルで寝てるばかりで、せっかくのハワイなのにあの青い海を見るでなし美味しいものを食べるでもなし、何より満足に買い物さえ出来なかったのよ」

そして今さらだけを繰り返しながら新婚旅行中、夫である三橋の気遣いのなさを愚痴り続けていた。チューミーが勢いこんで話し続ける間、その吐息と鼻息で紙コップに突っ込まれたままのストローが少しずつ動いていく。赤い口紅がべつとりと付いたストローが紙コップの縁を沿うようにしてゆっくりと移動していく、そのたび長針で優雅に時を刻む花時計のようにも見えてときおりその動きを横目で追ってしまう。

チューミーとは同じ会社を就職口を選んでしたが、チューミーの方は就職後一年を経たずして晴彦の同僚でもある三橋と早々に社内結婚でゴールインしていた。友達内でも結婚一番乗りなチューミーに英子も洋子も羨みの声を上げたものだけれど。とうのチューミーは華の二十代を子育てと家事で無駄に十年費やしたと愚痴ってばかりいた。

「どうもできやすい体質みたいでさ。本当のところはあの新入社員歓迎会の際の流れの、まあいわゆる酔ったはずみのミスがって奴なのよ、正直なところ」

幾分鼻に皺を寄せながら冗談めかすチューミーの話を、英子は軽く笑いながらを装って聞いてはいたが、内心様々な思いが胸に渦巻いていた。まるで逆回しのビデオ画面を見せられるように。

「まあそれほど嫌いなタイプでもなかったから、まっいいか、っていう感じでね。三橋

の方でも私に対しては多分にそんなところだろうけど」

嫌いではないが好きなタイプでもなかった。たった一度のことで出来てしまったというその事実のため、それだけのために三橋と結婚したというのか。その陰で英子がどれほどの思いをして耐えていたかをチューミーは知らない。

「どんな男と結婚してもさほどの違いはないっていうことなのかな」

「そうよ。化粧品と同じでさあ。自分の肌にあうのが一番いいのよ。それがとびきりの美人になると思っただけで使うけれどどのメーカー使おうとさほどの違いはなくどれも一緒」  
「ってことは塗る側の土台でいかようにも変わるってこと？」

「そういうこと。だから♪のぼりくどりの船人をやめて、♪川の流りに身をまかせうでいきなさいよ。そうすりや明日からでも電気煌煌、ばっちりだって」

「電気煌煌って？」

チューミーの言葉の意味が分からず眉間に皺を寄せて聞き返す英子に、

「一晩中でも差し込みっぱなしってことよ」

片目をウィンクするようにして答えた。

ともすれば陰湿になりがちな性的話も明るくカラリと話す。機転が利いてウィットに富むチューミーは昔からいつでも人気者だった。彼女がいないと歯が欠けたようになってしまい仲間内でも花的存在として位置づけられていた。O型の性格分析そのままに大らかで大仰な性格は常にリーダー的役割でもってみんなを引っ張っていていた。

チューミーというおかしなあだ名がついたのも、

「私今日、日の丸でさあ血の海なのよ」

と下腹を押さえると腹痛加減な顔をしかめながら自分をこう表現したところからだっ  
た。

血の海、でチューミー。

いつしかこれが彼女のニックネームとなってしまい、それからは誰も純子とは呼ばなくなっていた。

チューミーとおしゃべりし続ける時間は何より楽しいひとときではあるが、ときおりチューミーの口について出る言葉が英子の胸をえぐる。それは遠い昔にどうにか縫いあ  
わせた胸の傷口を一本一本切り開いていくように。

あれからどれぐらい時が過ぎたのだろうか？

あの試験管はトイレの棚、買い置きのとイレットペーパーの横に立てかけられたまま埃をかぶっていた。催促しようにも機嫌を損ねてはどの遠慮から中々言い出せないままに日を送っていた。

「まっいいか」

チューミーの口癖を真似てみる。誰に言うというわけでもないが、自分に言い聞かせるようにして言うとそのまま二階に駆け上がった。

「いっちょ夏物と冬物の整理でもするか」

ダンスや押入れを開けると無造作に突っ込まれた洋服達が目に飛び込んできた。よくまあこれだけの服を次々にといささか自分でもあきれながらあれこれとひっぱり出しているときだった。ふいに階下で電話のベルが鳴った。

「はいはあーい、お電話出るわ」

拍子を取りながらリズムミカルな足取りで階段を下りていった。早く出るよと催促するように鳴り続ける電話に飛びつくと受話器を上げた。

「はい中島でございます」

なぜかしら一音高い口調になる。

受話器から流れる口調でその家の教養度知性度が窺い知れるというものである。

長く電話応対をしてきた英子の職場経験からくるものだ。会社の顔が受付なら、家庭の顔は受話器を上げたときの妻の一声だと思っている。だからいつも鼻から抜けた声で格調高く受けた英子にかけた相手は無言だった。

「もしもし……もしもし」

英子の呼びかけにもウンともスンとも言わない。

こういうときいつも着信拒否の設定をしておけばよかったと後悔する。手続きをするのの面倒さにそのままにしているおかげでこうしたいはずら電話や繰り返しかかるセルスの電話に辟易しているのだが。

また無言のいたずら電話かと思い、受話器を置こうとしたそのとき、

「もしもし」

少し低めの声が耳に響いてきた。聞き覚えのあるその声にもしやの予感が走る。

「あの……俺、やけど」

やっぱりと思わず息を深く吸い込んだ。そのまま息を止めたまま棚に置いた写真立てに目をやるとそこには去年、たまたま懸賞で当たった温泉旅行で、晴彦と箱根に一泊泊

まりしたときの写真が飾られていた。カメラの前でポーズという晴彦は大抵口を真横に結び気難しい顔をする。お陰で夫婦での写真というところか式典の記念写真のようで堅苦しいものばかりしかなかった。その中で唯一笑っている晴彦とのこのツーショットの写真は貴重ともいえる。それで特に気に入って写真立てに入れ、ずっと飾っていた。その晴彦の笑顔から視線を外すようにして受話器の声に集中した。

「あれ誰かと思ったら。久しぶりね、元気してる？」

つとめて声を張り上げ明るく話した。

「まあまあ……つてとこなんだけど」

「そう……で、何？ 急に……いきなりだからびっくりした」

誰一人として聞いている者としていない昼間だから。あえて女友達としゃべっているふりを装う必要などないのに、写真立ての中から晴彦が耳を澄ましているような気がしてなぜかへたな演技をしてしまう。

「いや……どうしてるかなと思って」

「まあ……相変わらず、だけど」

言葉は繋がらず途切れ途切れの会話になってしまう。どうしても一言一言の間合いがひどく長くなっていく。数秒の沈黙ののち、言いたいことを躊躇しているふうの受話器の向こう側が軽く息を吸い込んだのちゆっくり吐くようにしてまたしゃべり始めた。

「相変わらずかあ……いいことだよ、それが一番」

「そうかしら。でもこのまま平凡な専業主婦で大して波風も立たずに一生終わっているのかしら、なんてたまに考えるけど」

「だけどいざ波風が立ってみると穏やかだった日々がこの上もなく貴重に思えてくるもんさ。人間、幸せの中にいるときほどそれに気づかないものなんだよな」

まるで何か経験から得た結果を話すような口ぶりに英子は微かな異変を感じ、

「何だか随分悟ったようなこと言うわね」

軽く笑いをこめて話すと、

「実は俺、離婚したんだ」

離婚という思わぬ言葉に、英子の鼓膜はまるで像に踏み荒らされるような振動を感じた。

何か言葉をかけねばと思うのだけれどたいへんねえとも辛いわねえとも言えずにいた。どんな言葉も電話口の向こう側にいる三橋には上滑りな慰めの言葉にしかないよ

うに思えたからだ。

「この前、チューミーに会ったときそんなこと何も言ってなかったけど」

ふいに二、三日前スパーで会ったチューミーの顔が脳裏に浮かんだ。あのときの彼女には微塵もそんな陰りを感じさせなかった。いつもの口達者な話しぶりでユーモアを交え話をしていただけ。

「まだ親以外誰にも言ってないからさ」

押し黙ったような口ぶりから三橋の苦悩が窺える。それだけに受話器を手にした英子もこの先どう言えいいのか言葉に迷う。かける言葉はないに等しいのだが、だからといってすぐに切る気にもならない。受話器を手にしたままの沈黙が妙に息苦しきを感じさせた。その沈黙を破るようにして三橋が一言言った。

「ちよっと会えないか？」

突然の誘いに胸は心臓をぶち破らんほどにときめいた。思うにこんなときめきを感じたのはいつ以来だろう。主婦になって十年、もうとうに忘れたはずのときめきに英子の心はかきむしられるほどに高鳴った。

「今さらだけど無性に会いたいんだ」

今さら、そう今さらよ。今さら会って何になるというのよ、と断るつもりのはずが、

「君に会ってほっとしたいんだ」

まるですがってくるような言葉が英子の鼓膜を狂おしいほどに震わせた。その瞬間、

「いいわよ」

思いとはまるで反対の言葉を口にしていた。そんな自分に自分でも驚いている。

どうして会う約束なんてしたのだろう、と。首を傾げながらも受話器を置いた右手はそのまま棚に置いた写真立てへと伸びていき、まるで晴彦の笑顔を封印するようにして写真立てを反対に回していた。

思い切って押した喫茶店のドア。

ほんの少し敷居が高く感じたのは気のせいだけではないのかもしれない。

喫茶店の一番奥、隅っこの席に三橋は入り口に背を向けるようにして座っていた。

別段痩せたようにも思えなかったが逆境にいるとき、人はどんよりと曇った空気をも身にまとうのだろうか。青い背広が一瞬黒く厚いレインコートを着ているように見えた。

「待った？」

まるで恋人同士の昔に戻ったようにして声を掛け、席に座った。軽く頭を上げると、たいして待ってないよとばかりに首を横に振る、その仕種も昔と変わってはいない。何一つ変わってはいないように思えるけれど。三橋と正面きつて向き合うとお互いの顔に深く刻まれた皺に黒髪の間から見え隠れする白髪に月日の流れを感じさせた。

こんな喫茶店でコーヒーを飲むなんて一体いつ以来だろう。また夫以外の男とだって。そんな思いの英子に三橋は開口一番、こう言った。

「いつまでも変わらないな」

そんなわけはないのにと思っただけでもこう言われると女はうれしいものだ。三橋は英子だけでなく他の誰に対しても同様ではあったけれど、髪型を変えたことからアライインを引いたことまで些細なことにまで気づいてすぐに声をかける。俗に言うマメな男で、三橋の方こそ女心をくすぐるうまさは変わってはいないようだ。

「ありがとう。そんなこと言ってくれるの三橋さんだけよ。でもどっぷり主婦につかって、こんな赤のハイヒールなんてほんと久しぶり履いたのよ」

ほんの少し高ぶる気持ちを抱き胸に靴箱からこの赤のハイヒールを取り出してみた英子だったが、そこに思わぬ青カビが生えていた。ヒールの表面だけでなく靴底までもを覆いつくす青カビはパンプスの赤と混じってまるで二色のコントラストを描いているようでもあった。英子はヒールを手にしたまま軽いショックを受けた。ヒールに生えた青カビはこんな靴を履きおしやれをすることもなく主婦としてだけ暮らしてきたことを改めて思い知らされたからだ。すぐさま青カビをふき取るとそっと足を入れてみた。形のいい脛のラインはそのまま、まだヒールの履けるふくらはぎに安堵する英子だった。

「中島の愛が隔々まで深くいきわたっているから若いんだよ。でもあんまり愛が深すぎで子供、まだなのか」

「あのとときのツケが今ごろ回ってきたみたいで中々」

コーヒーカーップに目を落とす。

忘年会帰り、千鳥足でもつれあう英子と三橋とがネオン街へと消えていく。

まるでモノクロのビデオ画面を再生するようにカップに注がれたコーヒーに映し出される。その場面ごと飲み干すようにして喉に流し込んだ。

「タイミング、ずれてるのね」

「タイミングかあ……」

英子にとって三橋は入社したときから気になる存在だった。とはいえ自分から告白す

る勇氣もないままに、それなりのリアクションは見せながらもいつか三橋が英子の思いにきづき食事にでも誘ってくれないからと待っていた。こうして英子が「待つて」いる間に三橋とチューミーはただならぬ仲になっていたのだ。ある日の朝礼で突然二人の結婚を発表されたときにはハンマーで頭を打ち抜かれるような衝撃を受けた。英子だけでなく社内の誰もが同じ思いで、まさかあの二人ができていたとはを口にした。

英子も二人が付き合っていることさえ知らなかっただけに三橋への思いは口にすることもないままにそっと封印した。けれども英子の三橋への思いはどこかでずっと燻ったまま種火だけを残していたのだ。その消すことのできない種火が当時流行っていた不倫ドラマに触発されるようにして炎を高くした。忘年会帰り、酔ったふりをして三橋の肩にもたれかかるとそのままホテルへ入った。その後続いた三橋との不倫関係には友達の夫と、という罪悪感はあるけれども三橋への積年の思いを遂げることができたことで満足していた。

このままひととき愛し合うだけの恋でいいと思っていたけれど。思わぬ妊娠に英子だけでなく三橋も苦悩した。墮ろせとは言わないけれどだからといって生めとも言えずに右往左往している男。もちろん英子にしても未婚の母になるほどの勇氣もないし、まだ自分のこれからの人生、捨てたくはない、そう考えるとやはり選択肢は一つしかなかった。

「もしあのとき離婚してくれてたら私、墮ろすこともなかったし中島とだって」

小さな命を闇に葬ったことは想像以上に英子に罪悪感をもたらした。何より三橋の「正直生むって言われたらどうしようかと思つた」という本音とも取れる一言に不倫というものの空しさを嫌というほど思い知らされた。そこから三橋への愛も急速に冷えていき結局、別れた。一つの恋が終わつたという喪失感はある以上に心に隙間風が吹くものだ。その隙間風を埋めてくれるようにして現れたのが中島だった。三橋に比べると社交的にもなく無口でどちらかという男としての魅力には欠ける中島には興味もなかったし、眼中にもなかったといつてもいい。たまたま寿退社する社員の送別会でどういうわけか隣同士に座つた。そのときだって正直、この人の隣かあと心の中で舌打ちをしたほどだった。だが不思議なことにそれからすぐの社内旅行の宴会の席でもまた隣同士に座ることになってしまい、余興のゲームで手を握りあつた。そのときの手の暖かさが妙に心に残っていて、なんとなく言葉を交わすようになった。三橋のようなウィットに富んだ話をするわけでもなくユーモアのセンスもまるでないけれど、どこかぶつきら棒でぎこち



ないとも思える晴彦の接し方が英子の心を和ませてくれた。次第にその存在が英子の中で大きく膨らんでいき、三十間近という焦りにも押される感じで晴彦にしがみつくと結婚したのだった。

「お互い座る場所が違っていたよな」

三橋の言葉が心に染みだ。

もしあのとき離婚してくれてたら、それよりも英子の方がチューミーより先に三橋とつきあっていたなら、というもしもを何度積み重ねてみたところでどうなるわけでもない。

現実的などころでお互い座る場所が違っていたのは紛れもない事実なのだから。結局人間は少しずつずれるタイミングを繰り返して追いかけてながら一生かみあうことができずに終わるのかもしれない。

軽いあきらめにも似たため息を一つつくとき、コーヒーカップに手を伸ばし飲もうとしたとき、同じようにしてコーヒーを飲もうとする三橋の指先に目が止まった。カップのコーヒーを持つ三橋の左の中指に血の滲んだ絆創膏が巻きつけられていた。

「中指どうしたの？」

何気に聞いた英子に三橋は軽く鼻で笑うと、

「ああこれ、ネギ刻んでるときにザクツとやっちゃまって」

「ネギって、三橋さん、料理するの？」

「今、やめ暮らしなもんでさ。自炊なんて大学のときの下宿してとき以来だなあ」

三橋の指先から男が台所に立ち包丁片手にネギを刻んでいる不器用な音が重たげに聞こえてくるようだった。

「納豆にはやっぱネギがないと」

普段ネギなんて入れても入れなくてもいいように思っているけれどいざネギなしで納豆を食べるとやっぱ物足りなくて。そうになると妙に欲しくなるもんだ、と自分に言い訳するように言うと、

「この水と一緒にかな」

さびしげな口調で一言言い、グラスに注がれた水を一気に飲んだ。空になったグラスをテーブルの端に静かに置くと、

「でもひと指し指でなくてよかったよ」

三橋は軽い笑みを口元に漂わせながら言うと、英子に視線を送った。

英子はその言葉の意味がわからず、三橋から送られてきた視線に軽く小首を傾げると、「男にとってひと指し指は女恋しい指さ。右って奴もいるだろうけど俺は左のひと指し指、だからさ」

そう言つてにやりと笑うと一旦落とした視線をもう一度英子に向けて送つてきた。正面から一直線に英子を見据えてくる三橋の、その熱を帯びたといつてもいいほどの目を見たとき、英子はその視線の意味を理解した。

三橋は花の周りを飛びかう蝶のようだった。

すらりと伸びた長い五本の指で英子が身にまとうすべてをまるで花びらをはがすようにして一枚ずつ脱がせていった。やがてまばゆい太陽のもと熟れた裸身は恥ずかしげにさらけ出された。

三橋は左のひと指し指で英子ほんの少し飛び出た突起を何度も往復させていった。次に英子の窪地が微かな湿り気を帯びていくのを確認すると、今度は英子の下半身に顔を埋めると突起から窪地へと徐々に長い舌を這わせていった。やや湿り気のある三橋の舌先が英子の特に敏感な髷の部分をつくりとなぞっていく。そのたび微かな吐息が漏れた。

舌先が往復をくり返すたび吐息は段々と甲高い声へと変わっていき、その舌先に導かれるようにして窪地からはあふれるほどの果汁がほとぼり始めた。英子の声が脳髓までもを切り裂くほどに変わったところで英子の唇の端から糸を引くようにして唾液が一筋漏れた。唾液は頬を伝って顎へと放物線を描くようにして流れていく。

三橋は英子のその唾液でさえもまるで蜜をなめるようにして吸い取った。その瞬間、英子は三橋への思いが一層熱くなるのを感じた。

「早く」

今まで夫にさえせがんだことがないのに、今は無性に欲しいのだ。自分の中にこんなにも隠微な部分が隠されているとは。自分でも驚くばかりだった。けれどもそんな英子をいたぶるようにして三橋はじらすのだった。

「まだだ」

そういうと三橋の舌はこれほどないまでに英子の突起と窪地の往復を繰り返した。舌先は往復するだけでなくときに窪地の髷をかき分けるようにして奥深くにまで入り込んでくる。そのたび、英子はこれほどまでにないほど声を高くした。

早く、お願いだから早く、とせがむ英子の懇願とも思えるほどの声を三橋はしばし楽しんででもいるのかずっと聞き続けている。

「お願い、私、もうだめ」

英子の懇願に、三橋自身も英子の下腹部辺りで下半身を熱くしているのがはっきりとわかった。三橋も我慢できなくなったのか一気に英子の中へと入ってきた。

激しく上下に体を揺り動かす三橋は花芯の周りで忙しなげに動き回り蜜を吸い取ろうとする蝶そのものだった。鋭いキリのような触覚を英子の窪地の奥深くに差し込むと何度も羽をばたつかせ続ける蝶。やがて冬の終わりを見届けた桜が待ちかねた春の訪れにその花びらをいっせいに開いていくようにして英子はその白い肌のすべてをピンクに染め上げた。

英子が身も心もすべてを三橋に委ねるのを見届けたのち三橋は静かに英子の中で果てていった。

鏡に写った自分を何度も見る。

どこも変わらない、と自分自身に納得させる。夫以外の男に抱かれたからといって顔に何が変わっているというの。浴室で自分の体のすべてをくまなく点検してみた。乳房に内腿にそして秘部にも三橋を感じさせる証はなかった。さらにどこにも歯形もキスマークさえついてはいなかったし、何よりシャワーで充分洗い流した体には残り香さえも消えている。

これなら大丈夫と自分に確信する。

晴彦の方は風俗で遊んで帰った晩には必ずといっていいほど英子に食指を伸ばしてきた。

それは女房への裏切りに対する罪滅ぼしのつもりなのかかもしれないが。そんなときでも英子は晴彦の体温を普段よりかほんのちよっと熱いかなと感じるぐらいでさほどの違いを感じはしない。女の自分であっても夫が違う女を抱いて帰った晩でも少しの違いを感じる程度でしかない。ましてや男なんて鈍感この上もない生き物なのだから、女房が違う男に抱かれたとしてもわかるわけではない。第一女房が浮気するなどということは思ってもみないことだろう。絶対わかるはずはない。普通にしていればいい、そうよ、と自分に何度も言い聞かせる。

いつも通りに帰ってきた晴彦。

普段通りに迎えた英子。

何気なく繰り返していた日常がこんなにも重い毎日だとは思わなかった。

その日、晴彦はやけに饒舌だった。少しアルコールが入っていたせいかもしれないが。よくしゃべる晴彦の話を英子は熱心に聞いた。聞いたからと言って夫への背信が許されるわけではないけれど。普段なら英子の方から話す世間話をいつもの晴彦にはバカらしいと一蹴されて終わるのだけれど。自分から口を開いてしまうと誰しもが持つ誰にも言えない自分だけの秘密さえも口にしてしまいそうで。どうしようもないほどの「恐れ」を感じ、その日はただ聞くことのみを徹した。

「いやーびっくりしたよ。三橋、憶えてるだろ」

いきなり晴彦が口にしてきた名前に英子の心臓は鼓動を高くした。

「あつああ…あの…：憶えてるけど」

言葉を口にしながら心臓の波打つ音が胸を突き破って晴彦の耳にまで届いているような気がして英子の心は波打っていた。

「離婚したんだってよ」

「えっ！ ああそうなの」

初めて聞いたように驚いてみせる。

ここは役者に徹して演じ続けるしかない。それでもへたな三文芝居の女優程度の演技力しかないのだから。動揺は隠せるわけもなく、顔に出ているに違いない。いまずぐにでも鏡を覗きたい英子だが顔色はどうでも胸の内では心のメトロノームが激しく揺れ始めていた。

「お子さんが二人いたと思うけど…：チューミーの方に？」

動揺を隠す意味もあつて自分から口を開いてみせた。

「ああカミさんの方に親権がいったらいいから」

「そう。うまくいってるみたいだったのに」

ゆっくりと力をこめて胸の振り子の速度を落とすようにして話し続けた。

「三橋の奴、冗談めかして言ってたよ。女房ともぶつかるし子供ともぶつかる。家族全員皆同じ血液型ってのはよくねえなあって」

チューミーは多分に人気者でも学生時代の英子はいつも彼女に悩まされ続けていた。

几帳面で神経質、A型特有の几帳面さを兼ね備えた英子は時間には特に正確だったが、チューミーはというとその真逆を行くように時間にはルーズで待ち合わせをしてもまず

まともには来なかった。しかもチューミーの下宿先のアパートは豚小屋と思えるほどに汚くその中で飲み食い寝るを平気でし、挙句の果ては当時つきあっていた彼とのデートというで大慌てで万年床をひっくり返すとその裏にへばりついたつけまつげを目元にくつつけるやすました顔して出かけていく。そんなチューミーにはあきれられるを通りこしてもう笑うしかなかった。仕方なく英子が掃除をしてやっていたら気がつけばチューミーは英子の掃除を当てにして自分の下宿に呼ぶようになっていた。

そんな大雑把でだらしない性格でもどこか憎めないチューミーを英子は好きだった。そのO型の典型のようなチューミーに夫である三橋も同じO型だったということはさらながらでも改めて思い知らされることだった。

「奴さん結婚するときや血液型の相性も確認しときやな、なんて言ってたけど血液型なんて所詮あてにならないもんだけどな」

軽く話す晴彦の言葉を聞きながら英子はほっとしたい、と何気に吐いた三橋の言葉を思い出していた。

やすらぎの場であるはずの家庭も、まるで戦場のようにO型の血の海で染まっていたのだろうか。それからでも晴彦は三橋の離婚について評論家よろしくしゃべり続けているた。

そのたびに晴彦の唇が上下に離れるとくつつくを繰り返していく。けれどもしゃべる言葉のすべてはかき消され、何も聞こえては来なかった。ただ目の前にパクパク口を開けた金魚が立っているだけにしか見えなかった。英子はよく動く晴彦の少し厚めの下唇だけをじっと見ていた。

晴彦は右のひと差し指だった。

それは右手の中で太くどっしりと幅をきかせていた。

今まで気づかずに見過ごしていたことがあらためて鮮明に刻み込まれていく。

似通った体型でもやけに重く感じることや、同じ花でも差し込む日差しにはこんなにも開き方を変えていくことも。

初めて浮気をして帰ってきた体で、夜にはまた夫に抱かれている。一日に二度も男に抱かれるなんて。まるで自分が娼婦にでもなったような気がする。晴彦の要求を断ることもできたのになぜだか無性に夫に抱かれないと思う。抱かれたからといって夫を裏切ったという罪悪感を消せるわけではないが、そうすることで罪の償いができるような気

がしたからだった。

いつもの手馴れた順序で愛撫していく晴彦の愛し方に今までなら満足をしていたのに。晴彦のひと指し指が英子の突起を往復しても身体はまるで反応しない、どころか今日に限ってはそのひと指し指に違和感さえ覚える。舌で、と懇願したいところだが今までだって一度も舌での愛撫をしたことのない夫にそんなことをせがむわけにもいかない。ごつごつとした肉厚なひと指し指の指先が英子の突起部分を往復するたび痛いという感覚にさえなる。また窪地はあふれるほどの果汁で満たされることもなく少しの湿り気を帯びる程度で嬖に至っては快感に奮えることもなく物足りなさを感じている。まるでそれは今にも落ちてしまいそうな危ない吊り橋を渡ると頑丈で落ちることのない橋を渡るのとの違いとでもいえるのだろうか。晴彦に抱かれながらも危ない吊り橋を渡っているときのあのスリリングさを恋しく思っているのだから。だからといって感じないままではいると晴彦に違う男に抱かれたことを疑われてしまいそうで。いつもより感じている素振りでも声を高くした。まるで自分がベトナムを演じる女優のようでもあった。英子のその感じている「素振り」に晴彦は安心したのか英子が「まだ」なのにも関わらず早々に英子の中に入ってくるやすぐに下半身を激しく動かし始めた。そんな晴彦が今日に限っては発情期を迎えた肉獣で、ただ排泄しているだけのオスのようにしか思えなかった。

英子は仕方なく天井に目を向けた。心も体も満たされないうちに早く終わらないかと天井の柵を見続ける。その退屈さを紛らわすために晴彦の背中の黒子を数えるという遊びを始めた。

一つ二つと三橋との違いを比べるたびに晴彦の背中の黒子をなぞっていった。そして腰の黒子まできたときにはすべてを比べ終えていた。

晴彦は幾度か英子の手を取りこの黒子を触らせたことがあった。肉厚でぶつくりとまるで黒豆のように膨らんだ黒子をなぜだか晴彦はひどく気に入っていた。

「腰の黒子は女なら淫乱黒子で、男のは子ぼくろ、子福ろ、幸袋こいぶくろって言うんだよ」

あまりにも真顔でいうので英子がそれ本当なの？ と聞きなおすと晴彦は冗談とも本当ともどちらにも取れるような苦笑いを一つするだけだった。今のところは冗談で終わっているようだが。ただ晴彦だけが少しずつ小太りになっていった。

「おめでとうございます、妊娠のようですね」

だいたいが不順な英子だがさすがに二ヶ月の遅れに気づいたとき、もしやの不安と期待を抱いて産婦人科の扉を開けた。

ゆっくりしたテンポのクラシック音楽が流れる待合室には、おしゃれなマタニティ服に身を包んだ妊婦達が数人座っていた。皆一応に大事な宝物とでもいったようにお腹に手を置くとまるでファッション雑誌かと見まごうほどの出産本を熱心に読んでいた。さすがにその隣に座る気持ちにはなれなかった。

英子はズボンにトレーナーといった軽装で待合室の片隅に座っている女達の隣に座った。

どういう症状で婦人科を受診しているのかはわからないが少なくとも普段着姿の女達は皆一様に無表情で、どこか不安気な面持ちで待合室に身を置いているようにも見えた。

しばし待たされたのち名前を呼ばれ診察室に入るといつものように紙コップを手にとイレに行ったのち、検査結果を待ち望むのだ。幾度となく繰り返してきたことでも以前の英子なら軽い期待を抱いていたけれど大抵その期待は裏切られ大きな失望に終わっていたから。診察室を出るたび待合室の妊婦達の姿が視界に入らないようにまるで目をつぶるようにして病院を後にしていた。

それだけに英子にとっては恋焦がれるほどに待ち望んでいた検査結果のはずが。

妊娠を告げる医師の一言がまるで重い判決のようにも聞こえた。

女の人生の中にあっても妊娠というのは一大事業を成し遂げるとも言えるほどのもので数えるチャンスのものでしかない。しかも限られた時期だけの、いわば期間限定の贈り物だといってもいい。この千載一遇ともいえるチャンスに恵まれた女達にとって、この上もない喜びのはずなのに。

晴彦と結婚して十年が過ぎた。基礎体温を測るだけでなく食べ物から風水、ときに体位を変えるなどといった、思いつくすべてのことをやってみたが。いっこうに妊娠しない自分の体に結婚前の三橋との不倫の果てに小さな命を闇に葬った。その罪深さをして神様は決してお許しにならないのだろうと思っていた。すべては英子の中で密かに処理をし、たとえ母にさえも悟られることもなかったはずのことが。神様はすべてお見通しなのだ。その大いなる神は今度英子にほんの少しの喜びと海より深い苦しみを与えた。

「予定日は来年の四月二十五日です」

心持ち笑みを携さえて言う医師にまるでその笑顔に応えないと悪いような義理を感じ

て、英子も無理して口角を引き上げると、

「ありがとうございます」

いかにもうれしいといった顔で答えた。

受付で次の受診日を予約すると、いつもなら目をつぶるようにして通り過ぎていた待合室の妊婦達の姿を今日はやけにまじまじと見てしまう。これから数ヶ月経てば自分もあの妊婦達と同じような妊婦服に突き出た腹を包み、待合室に座ることになるのだろうか。そのとき自分はどんな思いであの待合室に腰を下ろしているのだろうか。うれしさに満ちてかそれとも苦しみと罪悪感にさいなまれて、のどちらなのだろうか？

ふと十年前のあの日、たった一人で産婦人科の病室の堅いベットの上で目覚めたときのことを思い出した。自分では踏ん切りをつけたつもりのはずのことだった。盲腸を切るようなものだからと。けれども麻酔から覚めたとき、思わず下腹に手をやっていた。その瞬間自分の下腹がまるで中をくりぬかれた空洞のりんごのように思えた。この中にもう「あの子」はいなくなっただなと思うと急に涙が溢れ出した。

排水口に汚物として流してしまっただけという罪の深さは一生消えることはない。それと同じ罪をまた犯してはいけない、あの日誓ったはずのことが。

絶対に晴彦の子供に間違いはない。神様はそれほど意地悪なことをするはずはないと思う、のだけれど。

人と人にも相性があるように精子と卵子にも相性があるという。

それからすると三橋との逢瀬では子供ができたけれど晴彦とは何度抱かれても妊娠することはなかった。それを考えると今度も…と思わなくもない。けれども一度目の妊娠は繰り返しの不倫の果てで、しかも自分でも危ない日を承知の上で三橋に抱かれたのだから。

いつの不倫でも愛人の立場にある女は日陰者の身でしかない。だからどうしても女は妻に対しての嫉妬心を抱くし、ときに略奪心も芽生えるのだ。男はそんな女の思いなどわかるよしもなく自分の円満な家庭は壊すことなく妻とはうまくやり、なおかつ愛人ともよろしくやり一人悦に入っている。そんな三橋が急に傲慢な男に思えてきて一度ぎやふんと言わしてやりたくなった。言わば女の怖さを三橋に思いしらせてやろうというどこか復讐心にも似た思いで妊娠したのだから。

英子の子宮だってそんなとうに忘れたはずの男の精子など、いきなり見ず知らずの人間に寝室のドアを開けられるようなもので簡単に受け入れるわけではない。抱かれ慣れた



夫晴彦の精子こそ、より身近な存在に感じて受け入れるはずだ。

だから絶対に大丈夫、晴彦の子供に間違いはない。

そう言い聞かせながらも英子の心のうちに抱くメトロノームはときに激しく揺れた。

満ちたりた春を迎えていた。

風に舞う花びらがまるで未来への道を指し示しているかのようだった。さながらその道にピンクのじゅうたんをそこらじゅうに敷き詰めたといってもいいほどだった。

桜並木の続く道を一步ずつ歩いて行く、まるで幸福をかみ締めるようにして。

桜の木の下には死体が埋まっているのですよ。

ふいにいつかどこかで読んだ小説の一説が浮かんできた。

その死体は遠い昔闇に葬ってしまったわが子なのか。もしかして自分は今その子の屍を踏みつけながら歩いているのか。思わず桜並木の途中で足を止めてしまう。次ぎの一步が踏み出せずに立ち止まっている英子に、前を行く広い背中が大きく膨らんだポストンバックと紙おむつの袋を両手に下げていた。高齢のわりに安産だったこともあって英子は出産後一週間を待たずしての退院となった。だがたとえ一週間足らずの入院といえども今度の退院には赤ん坊がいる。赤ん坊一人が増えただけだといえどもかなりの大荷物になった。

産後の英子の体を気遣ってか晴彦は自分から進んでポストンバックを持ってくれた。

外国のレディファーストを真似たとでも思える気遣いなど今まになかったことだけに英子は晴彦の代わりように軽い驚きを持った。当の晴彦は英子がそんな思いで自分を見ているなど知るよしもなく肩に下げたポストンバック越しに振り向いた。

「どうした？」

いぶかしげな顔をする晴彦に、この不安を悟られていいわけではない。英子は急に思い出したというような顔をして言った。

「この子、つくづく半々だなど思ってた」

「はんはん？」

何が？ と訝しげな顔をする晴彦に、

「だってB型のあなたとA型の私にAB型のこの息子でしよう」

という英子の言葉に晴彦は何だそんなことかと言いながらも、

「きっと俺とお前のいいとこだけを半分ずつ取って生まれてきたんだよ」

つくづく俺も親ばかだなと笑いながらも晴彦のその顔には満面の笑みが満ち溢れていた。

晴彦の半分であること、これがどれほどに尊いものであるかをおそらく晴彦は知る由もないことだろう。たとえ夫婦であつても知らずにいる幸せというものがある。その大は推し量るべくものではないけれど。その中にはもしかしたらこれほどまでに重大なことが隠されているなどとは世の中の夫婦は思つてもみないことだろう。特に子供に關して言えば夫だが。だからこそ夫婦として一緒に暮らせるのだけれど。

命を授かったという尊さは何にも変えがたい貴重なことだった。だからこそ「生む」ことを選んだ。けれども誕生のその瞬間まで英子はずっと不安にさいなまれ続けた。

もしかして…いやそんなことはない。打ち消すたびに不安という心のメトロノームは大きく揺れ続けるのだった。

そして下された最後の審判はA B型というB型の晴彦とA型の英子の二分の一ずつとを分けた息子だった。

その瞬間誕生の喜びと許されたものとしての涙がとめどなくあふれた。

まるで山で道に迷い一晚歩き続けた挙句、夜明け間近の朝もやの中で行き先を指し示す方向板がはつきりと見えたような思いだった。もう思い迷うことは何もない。この指し示す道をまっすぐに歩いていけばいいのだと。

さっそく家に帰ったなら、英子のあのベットは粗大ごみにして出そう。独身時代から使い慣れたベットではあるけれど。外国製のセミダブルのベットはかなり高価だったから捨てるには惜しいが、もうこれからは一つの布団と小さな子供用布団の二つもあれば充分なのだから。

見上げた英子の肩に桜の花びらはずっと積もり続けていた。英子にはそれが願いの叶うピンクの流れ星のように思えた。

けたたましく鳴る電話。

幸と不幸とでは響き方が違うような気がする。

電話線に掛け手の思いまでもが乗っていくのだろうか。

夜十時を過ぎてのベルは胸騒ぎの音がする。

「えっまさか！」

受話器を持つ晴彦のこめかみは微妙に震えていた。電話から聞こえてくる相手の言葉

にかなりの衝撃を受けたようで、入浴後の汗と混じってひきつったようにも見えた。

毎晩、赤ん坊を入浴させるのは晴彦の役目になった。それまでの晴彦は仕事での遅い帰宅でもだが飲んで帰った晩ならなおのこと、お風呂も入らずに寝ることなどしょっちゅうだった。だいたいがお風呂嫌いな性格で二、三日お風呂に入らんでも死なるとばかりに下着も変えずにいる。髪に至っては一週間洗わないぐらいは平気で、頭をかきむしりながらそのまま寝てしまう。当然晴彦が寝る枕元の周囲は大量に舞い散ったフケが粉雪のごとくで、いくら夫とはいえその枕カバーを洗うのに英子はいつも閉口していた。けれども子供が生まれてからは入浴は自分の役目とばかりにどんなに遅く帰った晩でも必ず子供をお風呂に入れるようになった。その変わりようは晴彦に父としての自覚ができたことに他ならず英子にとっては驚きもしたが何よりうれしい変化だった。その日も子供をお風呂に入れ、入浴後の一杯を飲もうとしていたとき、突然電話のベルが鳴ったのだった。

英子は幸助の小さな手を取り甚平の袖に手を通していた。青の甚平は姑の里子が買ってくれたものだ。子供が生まれてから里子との関係もかなり良好なものに変わった。その一つが名前前で、里子は跡取り誕生にこれほどないまでに喜び、さっそく「幸助」という名前を用意した。わが子の名前ぐらい自分でつけたと思っていた英子だっただけに多分に反発を覚えたが、幸せを助ける、まさに自分達夫婦の、そしてこれから三人で築いていく家族としての人生を助けるようにして生まれてきた我が息子だと思いと、幸助という名前はまさに言いて妙な気がして英子は素直に受け入れたのだった。

自分が名付け親だということにも気を良くしたのかそれからでも里子はいろいろと気遣いをしてくれた。その一つが洋服で、洋服は毎回店の一軒も開けるほど何枚となく送ってくれた。しかもそのほとんどが有名百貨店包装の高級なものばかりで、それだけでも里子の孫に対する溺愛度が窺えて、ときに重いものを感じるときもあったが子供服というのは総じて可愛いものばかりなので送られてくるたび箱を開けるのが楽しみになっていた。特にこの甚平は気に入って着せている。着せやすいし何より湯上りの体温の上があった赤ん坊には涼しくて幸助も毎入浴後はうれしそうな顔をしている。赤ん坊の甚平姿がこれほどまでに可愛いとは思わなかった。幸助に甚平を着せ湯冷ましを飲ませていた英子だが、受話器片手の晴彦が気になり思わずその手を止めた。

「そうなんですか。昨日一緒に飲んだばかりだったのに」

それからでも電話片手に話す晴彦の口ぶりはひどく重く、くぐもったままだった。

「わかりました。じゃあ僕今からすぐにそっちへ」

そういつて受話器を置く一点を見つめたまま小さくため息を一つついていた。

「どうしたの？」

晴彦に問いかけると天井近くに向けていたうつろな視線を英子に戻しながら、

「三橋、あいつ交通事故起こしたって」

と一言言った。

交通事故？ 思わず問い返した英子に晴彦はもう一度深く息を吸い込んだ後、大きく吐き出しながら、

「かなりひどい事故らしくって」

どうも命に関わる大事故らしいという晴彦の言葉に、あの日、絆創膏をした三橋のひと指し指が思い出された。あの絆創膏に滲んでいたのと同じ血が今は三橋の額を流れているのだろうか？

英子の胸の真ん中に重い鉛の塊が一つ乗しかかったようだった。

「一刻も争う容態だつて言うから」

晴彦は慌てて出かける準備を始めた。英子は急いで着替えのズボンを探した。

晴彦は着替えたばかりのパジャマのズボンを脱ぎながらしきりと首を傾げていた。

「おかしいよなあ」

何が？ と聞き返す英子に晴彦は、

「あいつO型の典型みたいな性格してるのに」

豪放磊落でときに大雑把なところはあるけれど、人望厚く、お山の大将的なリーダーシップのある三橋はO型の典型のような性格でそれは誰しもが認めるところだったが。

「手術するんで血液型調べ直したらあいつも俺と同じB型なんだつてよ」

何気に言った晴彦の言葉に英子は凍りついた。

そんな馬鹿な！ 思わず口をついて出てしまいそうな言葉を英子は慌てて飲み込んだ。たかが夫の同僚の血液型である。それが勘違いだとわかったからといってどうして我が女房これほどまでに驚くのか。晴彦に少しの疑惑さえ抱かせてはならないからだ。

この驚きですべてが露呈してしまったなら何もかもが終わってしまう。

「あらそうなの」

冷静さを装い、どうにかそれだけを言うと、英子はズボンを手にしたまま凍りついていた。五本の指はすべて固まり動かなくなっていた。気づいたふうもない晴彦は自分で

着替えのズボンを英子の手から引き寄せるとまだ湯上りで幾分赤みを帯びた足先をつっこんでいた。

「同じB型となりや知らん顔もできんしな。俺も人命救助のために行くてくるよ」

遅くなるから先に寝ていいぞと言いつつ晴彦は一人、夜の病院へと車を走らせて行った。

あなたこそ気をつけてねといいながらその後ろ姿を見送った後、英子はしばらく呆然として動けずにいた。

得たいの知れない巨大な悪霊が背中にへばりついてきたようだった。

悪霊は英子の背中に覆いかぶさると、苦しめ、苦しめ、幸せはそう簡単になれるものじゃない、わかったかとばかりに英子の肩を揺さぶってくる。

その声を振り払うようにして英子は首を振った。

そんなことあるわけがない。あの三橋もB型だったなんて。

今頃病院に着いた晴彦は看護婦から勘違いでやっぱりO型でしたすみませんと頭を下げられているに違いない。そうに違いない。だってこれは夢なのだから。夢の中の出来事に違いないんだから。打ち消せば打ち消すほど悪霊の笑い声が耳元でこだまする。

そんな子供染みた考えが通用すると思っっているのか。これが夢だと？ 夢なはずはない。

まぎれもない事実だということを一番わかっているのはお前自身だろう。

病院に駆けつけた晴彦が吐血している姿が見える。

血管が細く注射針が入りにくい晴彦は血管注射のたびに注射針を射しかえられる。その痛みに毎回耐えながら血管注射を受けていた。その晴彦の眉間に深い皺が一本入っている。いつものごとくに注射針の痛みに耐えながら採血している、その姿が鮮明に見えた。

やっぱりこれは事実なのだ。

英子は傍らにいる幸助に目をやった。

湯船にも浸かり水分補給の湯冷ましも飲んで、身も心も気持ちよくなったのか幸助は眠っていた。小豆大ほどの鼻腔が膨らんだり縮まったりを繰り返している。その小さな穴から漏れる微かな吐息には不安など微塵もないといった様子で安心して寝ている。その姿を見ると、この子のこの安らかな寝顔を不安に陥れるようなことをしてはならない。この子の幸せのためなら私はどんなことでもする、またどんなことでもしてみせる

わ、それだけの覚悟を持って生んだのだから。

幸助の寝顔にもう一度目をやり英子は何気に思う、赤ちゃんも夢を見るのだろうか。夢なら遠い昔に見た夢の続きをもう一度見ている、そんな気がする。

この夢の続きは五年後、あるいは十年後にどんな形で英子の前へ姿を現すのだろうか。夫晴彦に似た息子なのか、それとも亭主とは似ても似つかない他人の顔をした「我が子」なのだろうか。

胸に現れた鉛のかたまりは大きな振り子となってさらにも増して左右に揺れ始めた。まるでいつまでも揺れ続けるメトロノームのように。

揺れは段々と激しさを増していく。そのたび英子の脈も速く波打っていく。その脈打つ音がある囁きをもって耳に聞こえてきた。

夫婦は他人。

晴彦も他人、三橋も他人。

みんな他人なのだ。

日本中、いや世界中の女はみんな他人の子供を育てている。私もこれから他人の子供を育てていく、ただそれだけのことじゃない。難しいことなど考える必要はない、と。

世に住まう男のすべてだって子供が百%自分の子供であるかどうかなどわかるはずはない、また自信もないことだろう。ただ女房のことを決して自分を裏切るような女じゃないからと女房への絶大なる信頼感から安心しきって騙されているだけのことで。女の側からすれば自分の腹の中で育ち、産んだ、いわゆる本当に血を分けた「私の子供」以外はすべて他人の子供なのだから。たとえ亭主を密かに裏切っていたとしてもそんなこと知ったことではない。まさに関係のないことでどうでもいいことなのだから。

愛しいのは我が「子」だけ、それでいいのだ。

改めて気づいた真実に英子の口元は自然に緩んでいた。笑みは大きな手となって胸の中で激しく揺れ続ける不安というメトロノームの振り子を止めた。

傍らの我が子を抱き上げると幸助は何の不安もなげに英子の腕の中で小さな寝息を上げ眠り続けていた。その寝顔はまるで天使そのものだ。その天使に、

「そうよね」

と問いかけると天使がふいに両目を開けた。軽い驚きを持って見つめる英子に、

「そうだよ」

うなづくように可愛い悪魔は泣き声を上げた。